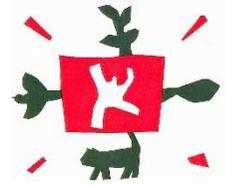




# 共同通信



2026年1月25日 352号(562号)

日本基督教団 西宮公会教会月報 〒662-0834 西宮市南昭和町 10-22

TEL 0798-67-4691 FAX 0798-63-4044、Email koudou@gamma.ocn.ne.jp

<http://koudou.jp/> 振替 01170-3-4901

## To tell the story 251

説教「あれから30年、長くて短い日々でした」

マタイによる福音書第3章13～17節

阪急電車の西宮北口駅改札口を出たところの案内板の教会の表示が、幼稚園が「休園」になったこともあって、新しくなりました。

真に人間らしく生きる／人間は生きものであり、自然の一部である

この表示は、新しくなったホームページにも、そのまま使われ、更に、「傾ける耳、涙する目、差しのべる手」及び、ハンス・キュンクが「イエス」の冒頭で、「私の信条(クレド)」としている、「真に人間らしく生きる」以下も加えられました。

昨年、2度ばかり、高槻市の「生命誌研究館」を訪ね、屋上の「食草園」にも案内していただきました。

「…食草園は研究館の屋上の12平方メートル、チョウのための庭です。チョウ

ウの幼虫が食べる植物は種ごとに決まっています。食草園にはさまざまな食草を植えています。見つけたチョウと食草がどのような関係を結んでいるか探してみましよう」となっています(「チョウのレストラン、『Ω 食草園』へようこそ」より)。

で、「チョウのレストラン『Ω 食草園』へようこそ」には、「…身近な庭や公園で生きものを見ることが、ぐっと楽しくなりますよ」ともあり、そう言えば、私たちには「…身近な庭」「身近な畑」「身近なキャンプの場所(後川、平安荘キャンプ場)」などがあり、少しばかり「目を凝らせば」、そこでの生きものたちとの関係が、うんと広がり、うんと深まることにも気づかされることになりました。

その一つのまとめが、駅やホームページの「人間は生きものであり、自然の一部である」です。「人間は生きものであ

り、自然の一部である」は、昨年、幅広く目を通させていただいてきた、中村桂子さんの著書の中でのどこかで、必ず言及されていることです。

「いのち愛づる生命誌／38 億年から学ぶ新しい知の探究」（藤原書店）

「科学者が人間であること」（岩波書店）

「子どもの目をおとなの目に重ねて」

（青土社）

「人類はどこで間違えたのか」（中公新書ラクレ）

「老いを愛づる」（中公新書ラクレ）

「日本の『食』が危ない！」（幻冬舎新書）

「中村桂子コレクション／いのち愛づる生命誌 1～8」（藤原書店）

それが、単に「必ず言及される」ということではなく、人間もまた「生きもの」である事実根ざして、それを探り、考察することが、必ずしも尊重されないことへの「危機感」が結実したのが「人間は生きものであり、自然の一部である」なのです。

そんな当然の事実根ざすとすれば、生きものとしての人間の日々の営みが見えてこざるを得なくなります。

「呼吸している」空気、「飲んでいる」水、「食べている」食物、「着ている」衣類、そうした環境すべてが「人間は生きものであり、自然の一部である」ことと、切り離すことのできない営みになります。

たとえば、東電福島で重大事故になっ

た原子力発電所は、国・東電が「想定外」とすることに対しても、そもそも、その稼働が、一つには、自然の営みを人間の「想定内」にしてしまっていること、更に、その稼働が、人間の自然の営みとは、決して「なじむ」ことのあり得ない、放射性物質を扱うという意味において、「人間は生きものであり、自然の一部である」ということと、中村桂子にとっては決して「両立し得ない」のです。

「中村桂子コレクション／いのち愛づる生命誌」で、これらのこと、東電の事故のことなどが繰り返し言及されています。

そんな生命、いのちの営みに、身近に接する世界・場所としたのが「生命誌研究館」の「チョウのレストラン『**Ω** 食草園』」です。

で、ふと思ったと言うか気が付いたのが、西宮北口の街の中にある、すべてが「食草園」ではありませんが、「百草園」らしきもの、言うところの「街の中の小さな広場（公園）」、西宮共同幼稚園、西宮共同教会の庭があって、そこには、「**Ω** 食草」ならぬ、「百草」が、日々の営みをつないでいます。

それらの一部を拾い上げたのが、2026年1月1日の新年礼拝のプログラムです。

人間は生きものであり、  
自然の一部である。

生き物たちが共存する。

街の中の小さな森の一年は、「生きとし生けるものたち」の日々の暮らしの場所だった。

小さなピンクの花が、若緑の葉っぱとなり…、夏が過ぎて、秋になって、実が茶色になるカリン。

葉っぱがまだらに色づく頃、もぎ取り残した柿の実をついばむ、ひよどり。

庭のどこかに地下の城を構える黒蟻の遠征。

集められた葉っぱを、庭の開けられたフレコンパックに忍び込んで土に変えていくミミズたち。

川沿いのプランターのポーチュラカに舞うシジミチョウ。

実になったしその枝を揺らしてついばむ雀。

櫛の巣作りでにらみをきかせていたカラスの子どもは、今は一人前にカアカアと鳴いている。

全体が真っ赤に見えるクリスマス・ホーリーの実もある日気がついたら一粒も残っていない。

街の中の小さな森では、秋ごろからほしまつりの背の高い竹の先で緑の旗が揺

らいで、新しい年を迎える。

人間は生きものであり、  
自然の一部である。

これは、「人間は生きものであり、自然の一部」である営みそのものであり、少しばかり見つめてみれば、その営みにはもっとたくさんの発見、そして、そこから一步踏み出す時、そこに流れる川・津門川では、百ではなく二百、三百の生きものとの出会いが待っています。

それがかけがえのない生きものの営みであるという意味では、ホームページの、ハンス・キュンクの「信条 (クレド)」そのものでもあるのです。

イエス・キリストのあとに従いながら、ひとは今日の世界で、真に人間らしく生きて、行動して、苦しんで、死んでいくことが出来る。

幸せな時も、不幸な時も、生きる時も、死ぬ時も、神に抱かれて、人々をおおいに助けながら。

祈ります。

(菅澤 邦明)



サクラソウ

## 私はふしぎでたまらない

今年4年生を担当し、主に国語と社会を教えています。国語と社会、教科による扱う材の違いや教科の見方や考え方の違いはありますが、どちらの教科もいきつくところは「人とは何か」を探究する学問ということです。立川談志は「落語は人間の業の肯定」と表現しました。国語も社会も感覚として似ています。国語は文学、社会は社会的事象を通して人とは何かを探究していく。その中で、人間は弱い生き物であるということ、それが良いとか悪いとかではなく、そういうものだとまるっと受け止めること。授業ではそんな素養を育みたいと考えています。

国語授業では物語文、説明文、文法と様々扱いますが、中でも詩の授業が好きです。詩ならではの人間の深い部分に触れる力があるからです。

金子みすゞの『ふしぎ』について子どもたちと授業をしました。世界の身近な現象に対して次々と「なぜ？」を投げかけますが、事実の説明はありません。理由も求めません。ただ「ふしぎだな」と受け止める。そこに魅力を感じます。

ふしぎ 金子みすゞ

私はふしぎでたまらない、  
黒い雲からふる雨が、  
銀に光っていることが。

私はふしぎでたまらない、  
青い桑の葉たべている、  
蚕が白くなることが。

私はふしぎでたまらない、  
たれもいじらぬ夕顔が、  
ひとりではらりと開くのが。

私は不思議でたまらない、  
誰にきいても笑ってて、  
あたりまえだと、いうことが。

詩を読んだあと、子どもたちは自分たちでも作ろうと言います。自分の思っているたくさんふしぎを書き出し、仲間と共有し、最後は金子みすゞのリズムに当てはめました。最後には一人1つのふしぎを合わせて、クラスで一つの詩にしました。

「ふしぎ」 関西学院初等部 4年 A組

私はふしぎでたまらない、宇宙の果てをたずねても、宇宙の終わりが無いことが。  
私はふしぎでたまらない、地球を見るとまるいのに、この世がまっすぐたいらなことが。  
私はふしぎでたまらない、見んなふつうの人間だが、みんなちがっていることが。  
私はふしぎでたまらない、宇宙のはてを探しても、カップ焼きそばないことが。  
私はふしぎでたまらない、おばあちゃんはやさしいが、ママの顔はやばいこと。  
私はふしぎでたまらない、風がささやく夜の空、小さな声が聞こえることが。  
私はふしぎでたまらない、なぜここにいて話せるの、言葉生まれひびくのが。  
私はふしぎでたまらない、楽しく生きる人間も、いつか天に行くことが。  
私はふしぎでたまらない、みんなの笑顔集めても、自分の自信ないことが。  
私はふしぎでたまらない、あんなに白い雲たちが、あんなに黒くなることが。  
私はふしぎでたまらない、風はどこから来ているの、知らずの道に来ているの。  
私はふしぎでたまらない、緑色の信号を、「あお」と平気に言うことが。  
私はふしぎでたまらない、魚がすみつく小さな川の、流れをかえていることが。  
私はふしぎでたまらない、夜になると光る星、とてもとても遠いこと。  
私はふしぎでたまらない、狩りをやってもとれないが、年をいっぱいとることが。  
私はふしぎでたまらない、時間が経つが生きてても、過去に戻れないことが。  
私はふしぎでたまらない、だれもかれもにたずねても、知らない人がいることが。  
私はふしぎでたまらない、黒い宇宙の果てまでは、誰もみたことないことが。  
私はふしぎでたまらない、雨や晴れなど毎日と、天気かわっていることが。  
私はふしぎでたまらない、だれもない静かな夜、ぶきみな声が聞こえることが。  
私はふしぎでたまらない、宇宙は今も回っているのに、私は回っていないことが。  
私はふしぎでたまらない、教師が外から来るとき、学生黙っていることが。  
私はふしぎでたまらない、いろんな国はにているのに、国が分けられていることが。  
私はふしぎでたまらない、緑の木から赤や黄に、しぜんと変わっていることが。  
私はふしぎでたまらない、よその誰かが大空の、景色を変えていることが。  
私はふしぎでたまらない、山に霧たち風わたる、鳥の声聞き知ることが。  
私はふしぎでたまらない、なんで宇宙黒くて、地球は青くなることが。  
私はふしぎでたまらない、真っ黒な空、星たちが、きらり光っていることが。  
私はふしぎでたまらない、青くて丸いこの地球、そんなに青くないことが。  
私はふしぎでたまらない、誰にきいても笑って、あたりまえだと、いうことが。

疑問があればすぐにスマホで調べ、わかってもないのにわかった気になる私たち。また自分の内面や感覚、価値観を言葉にして整理できたり、抽象的な概念をわかりやすく説明できたりする人がもてはやされる昨今の言語化ブーム。言語化ブームの背景には価値観が多様になり、言葉で丁寧に説明しないと伝わらない社会があるとも言われますが、さてどうでしょうか。言語化できたら私たちはわかり合えるのでしょうか。

わからないはわからないでいい、ふしぎはふしぎでいい。言葉にできない余白を大切にする感性を詩と子どもたちから学びます。

(石田 航平)



木蓮

## 今月の畑だより

1月の幼稚園の畑では、昨年、苗を植えたマルチシートから顔を出している玉ねぎは緑の葉っぱが鮮やかです。一方、イチゴは、葉っぱが地面にへばりつくようにして寒さを耐えています。その葉っぱが、赤っぽいのは、「防寒対策」だそうです。2月になると、イチゴにはマルチシートが、かけられることになっています。

玉ねぎのマルチシートには、5列の穴が空いていますが、苗を植えたのは、そのうちの3列です。残りの2列からは、一つ残らず雑草などの葉っぱを伸ばし始めています。どんなに寒くても、雑草たちはその「条件」の下で育つのです。

そして、畑の北側と、西側には水仙が育っていますが、西側の水仙は白い花をつけ始めています。北側は、お隣の畑と境界になっていて、除草剤が巻かれていますから、芽を出して少しは葉っぱが広がりますが、ほとんど花を咲かすと言う事はありません。

1月の園芸サークルの畑作業は、どうしても言うものではありませんが、主として草抜きで、イチゴのマルチシートの前には、少し丁寧に抜くこととなります。

そして、ホームセンターなどでは、ぼちぼちじゃがいもの（男爵、メイクインなど）の「種芋」が並び始めています。幼稚園の畑にジャガイモを植えるのは、例年は2月から3月にかけてです。その

ジャガイモの畝を作るための土盛りをしています。と言うのは、必ずしも排水のうまいかない畑では、昨年はそのジャガイモの畝が水に浸ってしまい、たくさんのジャガイモが掘れなくなりました。その対策のための土盛りです。

園芸サークルは畑での作業とは別に、色んな人たちが届けてくださったカリンの「かりんシロップ」、「カリンジヤム」を作ったり、八朔のマーマレードジャム作りなどにも取り組んでいます。

そして、月に1回（ほど）、淡路島平安荘キャンプ場に出かけ、整備作業や畑の手入れ（現在は玉ねぎ）などにも取り組んでいます。



# あんなこと こんなこと

2025年12月12日(金)17時30分～19時ごろ

## 合同子どもクリスマス会 西宮共同教会 礼拝堂

クリスマスの絵本を読んでいただき、けん玉大会を楽しみました。そして、1年ぶりのリビート山中さんをお迎えしてのコンサート。最後は、おなじみの「クリスマスの12にち」をみんなで歌い、笑顔あふれるクリスマスのひとときを過ごしました。



2025年12月21日(日)12時～13時30分ごろ

## クリスマス愛燦会 西宮共同教会 集会室

クリスマス記念礼拝のあと、西宮共同教会の集会室で、クリスマスの愛燦会を行いました。食事を囲みながらクリスマスを祝い、互いに1年をねぎらう、穏やかで温かなひとときとなりました。



2025年12月24日(水)18時～19時30分ごろ  
クリスマス燭火礼拝・クリスマスコンサート  
西宮公同教会 礼拝堂

24日(水)のクリスマスの夜には、みんなでクリスマス燭火礼拝を守りました。その後のクリスマスコンサートでは、井本英子さんの演奏に耳を傾け、みんなでクリスマスソングを歌い心弾む時間を過ごしました。そして最後は大いに盛り上がったクリスマス抽選会。当たった人も、当たらなかった人も、にこやかな笑顔あふれる時間となりました。



2025年12月27日(土)

**もちつき**

**西宮公同幼稚園 園庭**

今シーズン初めての「もちつき」を行いました。

量は少なめでしたが、寒い中、声を掛けあいながらついたもちつきは、楽しいひとときとなりました。やはり、つきたてのお餅は、格別の美味しさでした。



## 福島東電の事故 そこから考える

放射能、放射性物質、放射線・・・

またあの日がめぐってきます。東日本大震災・福島第一原発事故から 15 年が経とうとしています。福島県には今も居住できない帰還困難区域が、大熊町や双葉町を中心に南相馬市富岡町浪江町葛尾村飯館村の 7 市町村の約 309 平方キロメートルに及びます。政府は帰還困難区域の中に特定復興再生拠点、特定帰還居住区域を設定して住民を戻そうとしています。県内外への避難者は約 2 万 4 千人に上ります。

帰還困難区域とは、放射線の年間積算線量が 50 ミリシーベルトを超えており、5 年経過しても年間積算線量が 20 ミリシーベルトを下回らないおそれのある地域です。

ここでもう一度、放射能、放射性物質、放射線、Sv（シーベルト）、Bq（ベクレル）Gy（グレイ）などの言葉を整理してみます。

放射能は、放射線を出す能力のことです。以前は放射能には、放射性物質の意味が含まれていました。放射線を光に例えると分かりやすいです。例えば懐中電灯を放射線を出すもの（放射性物質）とします。懐中電灯は、スイッチを入れると光が放たれます。光が放射線です。この光の強さ（放射能の強さ）がベクレルです。1 ベクレルの定義は、1 秒間に 1 回の原子核崩壊を起こす放射能の量とな

ります。この崩壊で飛び出すのがアルファ（ $\alpha$ ）線、ベータ（ $\beta$ ）線、ガンマ（ $\gamma$ ）線です。シーベルトは、放射線をどれだけ人体が受けたかをあらわす単位です。その影響は、皮膚、臓器などによってかわります。肉体には放射線に強い部位と弱い部位があるわけです。

グレイ（Gy）は吸収線量（物理量）をあらわします。これに臓器ごとの係数をかけて出されるのがシーベルトです。ベクレルとグレイは物理量です。シーベルトはみなし値といってもよい単位です。IAEA（国際原子力機関）が係数を決めています。私はかなり恣意的な単位だと考えています。ベクレルとシーベルト。この二つの単位で私たちの被曝量はあらわされます。

日本では、「原子炉等規制法」「放射線障害防止法」などの法律によって、原発や放射性物質を取り扱う施設で働く人やその周辺の住民の被曝限度（線量限度）が決められています。この被曝限度には、自然被曝、医療被曝は含まれません。前者は、自然界から受ける被曝、例えば花崗岩からは放射線が発生しています。宇宙からも放射線は降り注いでいます。後者は X 線検査や CT スキャンなどです。日本は医療での被曝が世界一の国です。これらの被曝の上乗せ分が被曝限度（線量限度）とされる被曝量です。法律では、私たちは「一般公衆」とされます。その線量限度は年間 1 ミリシーベルトです。これは、1 年間に浴びる自然放射線量と大体同じです。

ちなみに六甲山系のふもとにある西宮は、日本列島の中では自然放射線被曝が多い地域です。それは六甲山の岩盤を形成する花崗岩にウランやトリウムが含まれているのが原因です。原発事故前までは、東日本のほうが少ないとされていました。

放射性物質は、私たちの生活の中に普通にあります。食べ物にはカリウムが含まれています。そのうち0.01%が放射性カリウムです。体のなかには食べ物由来の7000ベクレル(60キロ当たり)の放射性物質があるとされています。

つまり私たちは毎日、被曝をしているのです。それをもう少し分かりやすく説明します。以下は、今中哲二さん著「サイレントウォー 見えない放射能とたたかう」より、引用します。

一般人の被曝に対する感覚の目安

※被曝線量を落としたお金で換算します。10円落とすと「アッ」ですね。100円だとお菓子くらいですね。千円だとしまった！ 1万円だともう悔しくてなりません。そこら中を探し回ります。

線量	一般人	妊婦・子供・乳幼児
1 $\mu$ Sv	10円	100円
10 $\mu$ Sv	100円	1千円
100 $\mu$ Sv	1千円	1万円
1000 $\mu$ Sv	1万円	10万円
1000mSv	1千万円	1億円

つまり国が決める被曝線量とは、私たち公衆が強いられる「ガマンさせられ量」なのです。原発事故のあと、厚労省が決

めた食品の暫定規制値(放射性セシウム)は、年間被曝限度5ミリシーベルトをもとに算出されました。5ミリシーベルト！ つまり5万円を落としたわけです。厚労省は「5万円、たいしたことない。あきらめな！」と言っているわけです。庶民にとって5万円は大金です！！

わたしたちは、ガマン量(追加被曝線量)について、一人ひとりの目安をもつようにならないといけません。

国は私たちに対して情報を正確に、迅速に発信しません。それは15年前から、いや昔からです。自ら情報を取りに行つて考える訓練が必要です。日本の理科教育はもう一つだと言われています。自らの命を守るために勉強しましょう。最近では新型コロナの流行、そして国民の8割、高齢者は9割のワクチン接種率。接種が始まったころ、このワクチンはまだ治験中でした。予防接種健康被害救済制度による死亡認定は12月23日現在で1059人です。国のいうことを信じてはいけません。国は国民を騙して食べ物にするのです。

低線量被曝にはまだまだわからないことがたくさんあります。この場合、「予防原則」という考え方をとるべきです。わずかな被曝線量でもそれなりのリスクを考えることが大切です。

ただ「怖い」という感情にひきづられるのも考えものです。追加被曝線量は、個人的には、子どもの場合は自然放射線

の年間被曝量 1 ミリシーベルトの 1/10、100 マイクロシーベルト程度ならそう気にしなくてもよいと思います。大人は年間 1 ミリシーベルトまでガマンしてもよいと思います。とにかく自分なりに勉強して、日々の生活と折り合いをつけるのが大切だと思います。現代社会では被曝ゼロは無理です。

最後に被曝したら人間の体はどうなるのか、考えてみましょう。

地球が誕生したのは 46 億年前。放射線の嵐の中でした。生命は 35~40 億年前に誕生しました。カリウムの半減期は 12 億年。生命は放射線と向き合ってきました。

放射線には、電離作用があります。電離とは、DNA や RNA を構成している分子を切断することです。DNA は二本鎖、RNA は一本鎖の分子です。放射線はこの鎖を切断します。細胞が分子、原子レベルで傷つけるわけです。

生物実験のデータによると 1 ミリシーベルト被曝すると、4 パーセントの細胞で 2 本鎖の切断が生じています。この傷ついた細胞のほとんどは修復します。が、そのうち DNA が修復されなかったり、修復が不完全だった細胞が増えることとなります。それらの細胞がガン化したりして、私たちの健康を脅かすのです。

これで分かりだと思のですが、原発事故後、問題にされる晩発性障害です。ところが国は晩発性障害の回避策を全く講じていません。浪江町津島と飯館

村では、避難指示が適切に出されなかったために多くの住民が無用の被曝を受けることになりました。棄民政策です。

(四方 哲)

※参考図書 サイレントウォー 今中哲二著  
講談社 2012年

※ロシナンテ社では福島のことを PDF 版「ロシナンテ通信」として配信中です。総天然色のページです！ 年間購読代 3600 円

ご希望の方は…shikatatasatoshi@gmail へ



ボケ

# あれから15年、 福島はどうなっているのでしょうか？

講 師：<sup>しかた</sup>四方 <sup>さとし</sup>哲さん

日 時：2026年3月13日(金) 午後6時～8時

場 所：西宮公会堂 集会室

〒662-0834 西宮市南昭和町10-22  
0798-67-4691  
阪急西宮北口駅より 徒歩3分

参加費：500円



## 四方 哲

ロシナンテ社は1970年創業。「月刊地域闘争」(1990年「月刊むすぶ」に改題)を発行してきました。環境破壊と闘う住民運動の発信をお手伝いする雑誌です。私、四方は1984年から働いています。

「東日本大震災、それに伴って発生した福島第一原発事故。福島県の浜通りを中心に放射性物質の深刻な汚染が広がりました。今も約2万7千人から約5万人の住民が避難しています。震災関連死者数は約2400人。この多くが避難生活のストレスとされています。放射性物質とどう向き合うのか。そんなことを考えてみたいと思います。」

(四方 哲)

主催：関西神学塾

協力：障害児・者情報センター

問合せ：西宮公会堂

西宮市南昭和町10-22

TEL：0798-67-4691

MAIL：koudou@gamma.ocn.ne.jp

～♪ぼくのみる空と きみのみる空は  
つながっているから～

名護七曲（152）

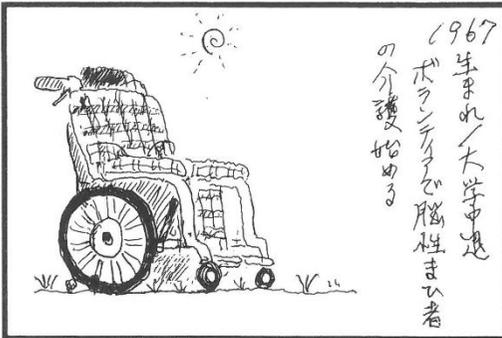
「dB」

みなさんこんにちは、名護伝道所の羽柴 禎です。今この原稿を書いているのは1月の初旬。「共同通信」にアップされるのは来月かもしれないのですが、とにかく寒いのですよこの部屋が。PCで書き仕事をする時はいつもここ（書斎）で仕事をしているのですが、この部屋だけエアコンを取り付けていなくて、夏もだけど真冬も結構厳しい環境▼机の上の温度計を見ますと19.5℃とは表示されているのですが、古いやつだからもしかしたら壊れているのかもしれませんが。体感的にはどう考えても4℃ぐらい。でも雪も降ってないし、私の体感がおかしいのかもしれませんが▼沖縄県って南国だから年中暖かいってイメージがあるかもしれないのですが、私が住んでる沖縄島北部地方は「やんばる」と呼ばれるだけあって、冬は風がビュービュー吹いて想像以上に寒いです。多分中南部も八重山地方も宮古島もそんなに変わらないはず▼1月も下旬あたりになりますと、今よりもっと寒くなる予定。最高でも14℃ってぐらい寒くなる日もあります。沖縄地方では寒さが厳しくなるこの季節を餅鬼寒（むーちーびーさー）と言って、旧暦の12月8日にお餅をいただきます。今年1月26日（月）のようです。いつ

も鬼餅寒の時期になると伝道所の向かいの上原さんが、月桃の葉っぱで包んだお餅を作って持ってきてくれます。元々は厄除け的な意味があったらしいのですが、私はキリスト教の信者なのですが、こういうのは躊躇なく感謝して美味しくいただきます▼私も名護市に参りまして1年目は冬でも暖かいなあと感じていたのですが、2年目からはさすがに「うう～寒い～」って感じるようになりました。何事もそうかもしれないのですが、数字だけでは量れない、その土地の肌感覚みたいなものがあるのかもしれないね。同じ14℃でも人によって感じ方が全然違いますし、数値が全てだって決めつけられない方がいいかもです▼関係ないけど、飯塚オートの100dBと、F35の100dBも全然違うように思います。オートレースのあのスタートダッシュの8走全開バリバリサウンドは、人の魂を震わせる夢と期待に満ちた爆音だわけですが、ジェット戦闘機が放つあの轟音はどちらかというと恐怖や不安を感じさせる種類の響きと圧。名護市はまだしも飛行場周辺の住民にとってはそれがほぼほぼ毎日。しかも昼夜を問わず。あれはさすがに慣れるとかそんなレベルの話ではありません。静かであればOKという話でもありません。兵器ですからね、そもそも。

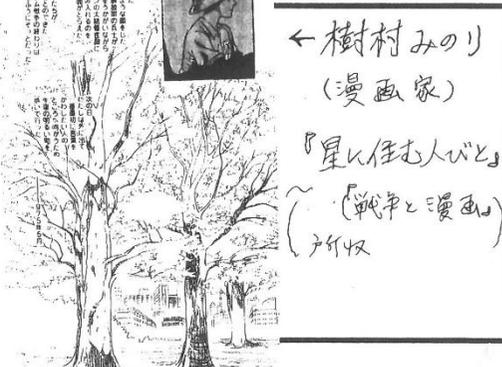
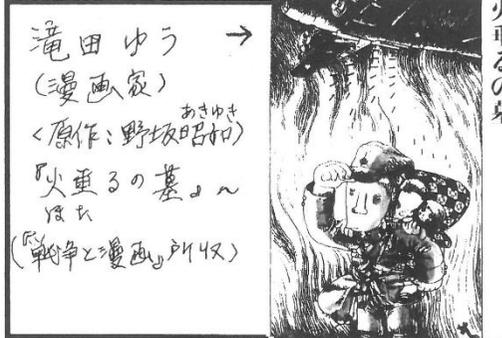
（羽柴 禎）

介護者 詩人のこと



2025.12/28 毎月日新新聞 別冊 /  
1978.1/10 『つげ義春集』 筑摩書房刊へ引用

マンガをどうん



# つとかわ・あれこれ

新教出版社  
小林 望様

田川建三さんの「リーメンシュナイダーの世界」のコピーをお届けいただきありがとうございました。

関西神学塾の講義では、「ぼんやり」聞かせてもらっていましたが、連載でも書いておられる。「…おそらく、たぐい稀な個性、とても他の追従を許さない傑出した彫刻家であることからこそ、あの『ブルジョア』たちの生き生きとした世界を、この地に生きる者たちには誰にでも馴染んだ親しいものを、その生き生きとしたまま描き出すことができた」のは、そのまま強い印象として残っています。

それは、神学塾でゴシックについて、話されたときのあの壮大な寺院を作っていた人たちの職人たちの理解とも共通しているように思っています。

こうした事は、後に目にすることになったクロボトキンが「相互扶助論」（大杉栄訳）で言及している事でもあり、中でもその5章6章は、そのまま田川さんのリーメンシュナイダー、ゴシックについての言及と重なります。

多分、田川さんの仕事の根っここのところにあるのは、クロボトキンの相互扶助のような、そのことで起こる躍動的な人間・社会理解があり、それこそが田川さんの「挑戦」でもあったように思います。

田川さんが、西宮公会堂の礼拝説教で、「我々、クリスチャンは！」とおっしゃって、びっくりしたことがあります、まさしくリーメンシュナイダーやゴシックの建物を建てた人たちの「生き様」が田川さんのクリスチャンだったのだと思います。

(S)

昨年暮れ、正月休みにゆっくり読みましょう。と思って、あれこれと5冊ほどの本と、大好物のクロスワードパズルの本を1冊購入したものの、よくよく考えてみると、年末年始は私にとって1年で1番忙しい日であることに後から気づく。年明け恒例の「坊主めくり大会」も今年は16名が集まり、犬も逃げていくほどの賑やかさ。孫の友だちも年末から泊まりがけでくるし、娘の友人も元旦のおせち料理をともにしました。あんなに大量に用意し、「残ったらどうしよう」と心配した食料も食べ尽くし、新年3日目にはもう買い出しに走る始末。広いとは決して言えない居間に大勢が集まって、食べたり、飲んだり、しゃべったり、遊んだり。こんな平和がいつまで続くのか…。

買い求めた本は、静かに机の上に積まれたままなのでした。

(S)

小さい頃、何度も何度も母に読み聞かせをねだった『いやいやえん』。「ちゅーりっぷほいくえん」や「くじらとり」「やまのぼり」——どのお話も、その世界にずっと引き込まれるようで、大好きでした。

その絵を描かれた山脇百合子さんの展示会が、三鷹の森ジブリ美術館で開かれていると知り、迷わず予約しました。山脇さんの高校生の頃からのスケッチや、膨大な海外の資料や書籍。絵を描くことはもちろん、たくさん刺繍作品も見ることができ、ワクワクが止まりませんでした。

「ごちゃごちゃから見えるもの」というタイトルの通り、机の上に雑多に並ぶさまざまな画材や、きれいに仕分けられた刺繍糸の缶。その一つひとつから、創作の息づかいが伝わってきて、「わたしも、こんな部屋に居たい」そう思わずにはられない、心が弾む時間でした。

もってゆっくり、時間を費やしたかったのですが、実は体調不良をおしての東京行きでした。頭痛と咳に悩まされ、さすがにこれはしんどい…と、名残惜しい気持ちを抱えながら、早々に東京駅へ向かうことに。

展示会は5月まで続くそうです。となると——もしかしたら、もう一度行ってしまってもいいかもしれません。

(K)



ミツマタ